
読んで楽しむダークソウル

ヨイヤサ・リングマスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読んで楽しむダークソウル

【Nコード】

N9428X

【作者名】

ヨイヤサ・リングマスター

【あらすじ】

この小説はオリ主が全エリア、全デーモンを倒す物語ではありません。

作者のフロム脳を暴走させて原作キャラで気に入った人たちの過去、現在、未来をそれっぽく書いていく短編集のようなものです。

尚、作者は10月26日現在で、ストーリーを二周しかプレイしていないので、プレイ不足による原作との矛盾や誤認などもありません。

その場合、投稿した話についても大幅な修正が入る可能性もあります。

まあ、基本的にギャグなので「こつこついうのもアリだろう」みたいな話にしていきますが。

DARK SOULS は最高に面白いのです!!

ヨイヤサ作品? テーマは『フロム愛によるシユールな作品』

第一話：病み村の犬（前書き）

ヨイヤサ・リングマスターと申します。

この作品は私のフロム愛によって書かれておりますので変わった話ばかりになります。

なんだか短編集としての作品ならいつ完結してもいいかな？ と
考えたら筆の進みが異様に早かったのでw

これからもこの作品は気分で投稿します。

第一話：病み村の犬

第一話：誰が予想したか！？ 『病み村』のエレベーター動力源の謎！！

あるところに一匹の犬がいた。

彼の名前はサカズキ。最初はただの犬だった。まあ、「ただの」と言っても、火を吹く真つ赤な色をしていることを除けばなのだが。

一族の中ではそれなりに力のある存在だったが、別段それを振りかざそうともしなかった。

彼には夢があつたのだ。それは自身の生まれ育つた『病み村』を活性化させて、観光地として人気を集めたいという夢だった。

その夢を、風の噂に聞いたのだらう『病み村』の支配者『混沌の魔女』クラーグがサカズキの元を訪れ、こう言った。

「お前の夢は実にすばらしいものじゃ。

私の妹のためにも、この『病み村』は人間性をたくさん持った人間を集めなければならぬ。

協力してくれぬか？」

「ははっ！ まさかクラーグ様が自分のごとき矮小な存在を目にかけていただけるとは光栄の極み。

貴方様なら私は全てを尽くしましょう」

そうして『混沌の従者』となった一匹の犬は、観光客から常々不便だとの声をもらっていた『飛竜の谷』側にある『病み村』の入口と蜘蛛姫姉妹の住む下層とを繋ぐ道にエレベーターを設置した。

そのエレベーターの動力源となったサカズキは、火を吹くこともなく、ただただ歩き続けて『病み村』の上と下を繋げるだけの仕事をすることになった。

仲間たちは『病み村』の支配者、『混沌の魔女』クラーグから直々に賜った役職に敬意を示し、『混沌の従者』となったサカズキは『病み村』の火吹き犬一族のボスとなったのである。

「自分には忠誠を誓う絶対の主がいる。

すでに火を吹くことも、やってくる人間を襲う必要もない」

火を吹く必要もなくなったサカズキだが、皆の尊敬を一身に集めるその崇高な職務は他の『病み村』のモンスター、大ヒルやデブからも『病み村』勢力の一角を担う存在として扱うのだった。

絶対の忠誠を誓える素晴らしき主に巡り合った一匹の犬、サカズキ。

その身体に『混沌の魔女』クラーグから古き時代の言葉を身体に直接刻み込まれた伝説の火吹き犬。

彼はいつまでも『病み村』のエレベーターを動かし続けるのであった。

……そんな日々が永遠に続くと思っていた。

しかしサカズキはある日感じたのだ。

常に心を感じていた自身が仕える主の気が消えたことを……

「馬鹿な！？ 主の気が消えた！？

まさか……いや、死んだなどありえん！

我が主が人間などに負けるはずなどない！

我が主クラーグ様が妹様を残して死ぬわけなどない！！」

より気配を探ろうと毎日のように何年も続けてきた『病み村』の上と下をつなげる滑車を回すという仕事を止めてまで感覚を鋭くして探った。

だが何度探ってもサカズキの敬愛する主、クラーグの気が感じられない。

「妹様が危ない！

主を倒した者に御側付きのエンジニア殿だけで対処できるとは思えん！」

サカズキは一声鳴き、一族を召集し、情報を得ることにした。

「サカズキ様、クラーグ様は確かに人間に倒されてしまったようです。」

しかしながら妹様はエンジー様の咄嗟の機転により隠し部屋に逃げ込んだようで難を逃れているようです」

「そうか……。」

皆の者、我は我が主、クラーグ様を殺した者を許してはおけぬ。故にこの『病み村』の上と下とを繋ぐ役職をお前たちに任す」

そう言っつてサカズキは旅支度を整える。

と言っつても特に荷物があるわけでもなし、世話になった『病み村』の他の種族の仲間たちに別れを告げた程度だが。

「では行つてくる。」

妹様のことはエンジー殿が見てくれるだろうが、妹様はそのお身体故に人間性を常に必要としている。

お前たちには私の仕事だけでなく、やってくる人間から人間性を奪う仕事も並行して行うように」

「……はっ！ 我ら火吹き犬一族はサカズキ様と妹姫様のために全身全霊をもって職務に当たります！」

側近たちに見送られ村を後にするサカズキ。

彼がクラーグを殺した人間に復讐するのはいつになるのかは分

からない……

第一話：病み村の犬（後書き）

火吹き犬のサカズキ君の名前の由来は、まあ、あれですねw

『病み村』のエレベーターをコロコロ回す犬がとても可愛かったものでw

何で第一話にこんなキャラ出すんだよ！？ という人がいることを期待しての第一話ですが、一応他のキャラも書く予定です。

蜘蛛姫姉妹は勿論ですが、『病み村』勢だとクラナさんや大沼のラレンティウスさんなんかも書きたいですね。

「爛れ続ける者」もクラグさん達の弟みたいですけど、指輪の説明を読むと、なんだかうっかり屋さんみたいで可愛らしいですし。

更新頻度は来月一日から連載予定の『うたわれるもの』の二次小説に影響が出ない程度にするつもりです。

ではこの作品を読んでくださった人たちにこの言葉を贈ります。
「アンバサー！」

第2話：ウーラシールの姫君と人喰いの妹（前書き）

タイトル通りの二人のお話。

この話も私のフロム脳によって書かれた作品ですので「確かにこういう話があるかもな」と思っていただければ幸いです。

本当に原作の設定などは限りなく広い解釈とフロム脳を基盤として書かれた物語ですので妙な雰囲気ですが。

この話が原作の真実の設定である可能性が零ではないというだけの物語です。

そんな感じの古代王国ウーラシールの物語。

第2話：ウーラシールの姫君と人喰いの妹

古代王国ウーラシール。そこは特に何があると言う訳ではないが争いのない、静かな国であった。

今回のお話はその国にいた、ある姉妹の物語である。

木々が生い茂る緑豊かな場所。そこに一人の少女がいた。

いや、もう一人。女性としての大事な部分を、わずかばかりの布で隠した、ずた袋を被った少女がやってきた。

「姉さん！」

「あら、ミルドレット。もう学校は終わったのですか？」

「今日は半ドンだぜ！」

それより姉さんは毎日ここに来るけど飽きねえのか？」

「ふふふ、私たちの国ウーラシールでは毎日を平和にゆっくり過ごすことが法律で決まっているじゃない」

「いや、別に法律ってわけじゃないだろ」

二人は姉妹。姉は名を>宵闇<と言い、妹はミルドレットと言う。

この魔術大国ウーラシールの王女である。

「それよりも聞いてくれよ姉さん！

今日は学校にスペシャルゲストとして、あの！>審判者<様が来てくださったんだよ！！」

「あらあらまあまあ　あの>審判者<様が来てくださったのですか。

それは素晴らしいことですね　」

>審判者<とは、このウーラシールの国よりも遠く離れた場所にある『嵐の祭祀場』と呼ばれる邪教崇拜の地で罪人を料理して骨までしゃぶり尽くすよと評判のデーモンである。

その容姿はデーモンだけあって常人の倍以上はある巨体と大きく裂けた口。それに頭に乗せたオウムである。

そんな彼だが、学ぶ意志のある者を拒まないウーラシールにある

調理師学校『ミルド神殿』は門戸を広く開いて誰でも受け入れるようにしているために、人外ながら首席で卒業をしたという過去もある。

そんな彼に憧れて『ミルド神殿』に入学する者も少なくない。

また『ミルド神殿』は調理師学校であると同時に、名前の通り神殿としての機能も持っている。

そのためにミルド神殿保有の騎士団は、高い信仰心を持つ『神殿騎士』通称アンバサ戦士、またの名を機動戦士アンバサと呼ばれる人たちで構成されており、その手には聖職者には不釣り合いながらもしつかりと神の加護を受けた巨大な剣や戦斧を持ち、背中には過去最優秀な成績で卒業した>審判者<の描かれた盾を背負う姿こそ基本装備としている。

敵には多大な徒労感を、味方には若干のウザさと安心感を与える選りすぐりのエリート of 装備にその姿が描かれていることからして彼の人気の高さは窺い知れよう。

「あなたも『ミルド神殿』の首席ですからね。」

>審判者<様からは学ぶことも多かったですよ。」

「はい！ 今日人間を材料とした料理を教わってきました！

いやはやさすがは>審判者<様。その独創的な調理方法は、まさに『超理』と呼ぶべき凄さ！

学校を卒業してからも研鑽を続けていたようで、他の料理の調理方法もどれも斬新かつ理を超えた素晴らしいものでした！！」

クスクスとおかしそうに笑う。宵闇く。

姉である。宵闇くは第一王女ということで、この国の次の女王になるか、婿をとることになっているのが決まっているのだが、妹ミルドレットは姉がしっかりしている分、自身の夢、すなわち料理人を目指しているのだ。

まあ、姉がしっかりしているかについては疑問が残るが。

「では姉上、今日は私の手料理を披露させてもらいましょう。暗くなる前に帰りますよ」

「いいじゃないですか、暗くなっても。」

私には『照らす光』という照明魔術が使えるのだから暗闇なんて怖くないわよ」

と言うか、この国ウーラシールには光を出したりという日常生活に使う程度の魔術しか存在しない。

根っからの平和的思考の国民性なのだ。

「いえ、ここ最近モンスターの活動が活発になってきていますし、姉上一人ではあつと言う間に殺されてしまうでしょうからね」

「死んだら死んだでその時よミルドレット。

人間つてのは生まれてから死ぬまでの間、終始『生きている』という実感を持てる人生を送ればそれは幸せなことよ。クスッだからまあ……、死ぬべき時に死ぬのならそれでもいいわ」

「まったく姉上は……」

> 宵闇<の言うことももつともだが、それは自分の周りの人の気持ちを蔑ろにしていると取られかねない発言でもある。

まあ、姉である> 宵闇<のことをよく知るミルドレットは姉の心をよく理解しているので、そんな風には考えていないのだが。

すなわち> 宵闇<は何も考えていないのだ！

「（何も考えていないのに、それっぽい事を言って話を煙に巻くのが上手い人だ）」

だがミルドレットは、そんな姉が大好きなので何も言わなかった。

そのまま、いつものやり取りを済ませたを終え、では城に帰ろうとしたところで異変に気づいた。

「!? 姉上！ 町の方から火の手が上がっています！」

「あらあらまあまあ……
どうしましょつか？」

王城へと帰ろうとしていた矢先に街から上がる煙。

「姉上はこのまま城に戻ってください！

私は『ミルド神殿』の神殿調理騎士の一人として敵を完膚なきまでに叩きのめして見せます！！！！」

このウーラシールに存在する調理師学校『ミルド神殿』の生徒と卒業生によって構成されるミルド騎士団は基本的に専守防衛だ。

そもそも大半の騎士が用いる『ミルドハンマー』は対人戦を意識しているために人間以上の巨大なモンスターやデーモン相手には使い勝手が悪い。

それに『ミルドハンマー』を使う人間は素人が多く、相手に避けられたり、パリイされると極端に何も出来なくなるのだ。（上手い人もいるが）

そのため騎士団の中でも斬り込み役を担当するミルドレットは何を置いても急いで駆け付けなければいけないのだ。

頭に「ずた袋」を被る以外は胸と腰を申し訳程度の布で隠しているだけなのだが、これでもミルドレットは騎士なのである。

「『人喰い』ミルドレット参る!」

手には彼女が尊敬する>審判者<の武器を模して造られた『肉断ち包丁』を持ち、町を目指して突っ走って行った。

「行っちゃったか……」。

じゃあ私も戦のことは可愛い妹に任せるとして、帰って寝ようかな」

妹が必ず勝つと信じ切っている姉>宵闇<はのんびりとした足取りで城へと帰って行った。

……のだが。

「……あれ? 何でだろう?」

私は確か、城に帰ってベッドに横になって、そのあと……」

気がついたら>宵闇<はクリスタルゴーレムに取り込まれていた。

「ここからは出れないし、別に命の危険ってわけじゃないけど、このクリスタルゴーレム何を考えているのでしょうか?」

寝て起きたらモンスター『クリスタルゴーレム』に取り込まれている。

この状況で理解できる人間など、そうそういないだろう。

「場所は……滝ですね。」

あ、向こうに首が沢山ある蛇がいる。やつほー

遠くに見える首のたくさんある蛇(竜?)の『ヒュドラ』にクリスタルゴーレムの中から手を振ってみると向こうもこちらに気づいて嬉しそうに頭を振ってくる。

どうやら好意的な存在らしい。

「国や妹がどうなったのか気になるけど……まあ、妹なら誰が相手でも勝てるでしょう。」

私は誰かが助けてくれるまで、ここでんびりしてようかな

そうして>宵闇くがこのクリスタルゴーレムの中から出れるのは、今から200年後となるのだが、その事を>宵闇くは知らない……。

第2話：ウーラシールの姫君と人喰いの妹（後書き）

とりあえずまあ、ミルドレットは料理人。姉は自宅警備員（次期王女）

そんな妄想で書かれた作品です。個人的には>審判者<の出版を増やしても良かったのですが、それだとデモンズソウルの小説になっってしまうので名前だけの登場となりました。

ミルドレット側の話でもまた書こうかな。

彼女は裸の割にけっこうタフですし、クラーグ戦でもそれなりに役に立つのは彼女が神殿騎士、それもアンバサ戦士だからなのでは、と思ったからです。リジエネは使ってませんが。

途中で詰んだセーブや育て間違ったキャラが何人かいるので、二回しかクリアしていないと言っても、彼女とは何度も会っています。今度は国が滅びてからの200年間と『病み村』のみんなと仲良くするほのぼの系小説でも。

とりあえず朝からノリでまた書いてしまいましたので投稿しました。

一応、投稿初日と最終話では一日二話更新をマイルールにしていますので。

あと原作で>宵闇<さんに会った人は分かると思いますが、他のキャラが「クリスタルゴレム」と呼ぶモンスターを彼女だけ「クリスタルゴレム」と呼んでいたので作中の表記はわざとです。

第3話：リカール王子の決意（前書き）

『不死の王子』リカールが不死になる前の活躍を書いてみました。

ぶっちゃけ「リカールの刺剣」のモーションがカッコよすぎたのでw

第3話：リカール王子の決意

一人の青年がいた。その青年、自らの血統にも強さにも驕ることなく、ただ一人の騎士として生きようとしていた。

そう、これは『不死の王子』リカールの物語である。

「王子、この度は我々の村を御救い頂きありがとうございます」

「我ら一時は死をも覚悟しておりましたが王子の姿に勇気ももらいました」

「是非ともまたこの村にお立ち寄りください」

時刻は夜明け前のまだ薄暗い中、小さな村とはいえ、その村では村人全員が早くから起きて集まっていた。

一人の青年の旅路を見送るためだ。

「僕の方こそこの村の皆さんには、とてもよくしていただきました。弱きを助け、強気を挫く。」

それこそ騎士のあるべき姿であり、僕の理想とする生き方です。

「また何かあれば何を置いてでも助けにきます」

村を離れる青年、王子リカールは村人たちの声援を受け、自分の力を必要としている辺境の村々を目指す。

「……僕は王子なんだ。」

王族は人の上に立つ存在であることを、その全生涯を以て証明し続けなければならないんだ。

王族としての存在を認められることにこそ価値があるんだ」

誰に言うでもなく、一人そう呟くりカール。

旅の前の父との会話を思い出しながら歩き続けた。

「リカールよ、貴様は間違っており。命を数、質、そういったもので考えてこそ真の王なのだ」

「父上、国とは民があつてこそその国。

質の優劣などなく誰もが同じ、そして数で命を割り切るようでは真の王とは言えないはずです」

リカールの祖国、特に変わったところがあるわけではないが、それなりの大きさを誇っている平和な国だった。

他国との関係も悪くなく、戦とも無縁の平和な国。理想的な国と言えよう。

だがそんな国でも災いは容赦なく人々を襲う。

どこからか現れた疫病ネズミの群れにより、この国は危機に瀕していた。

それもそうだろう。

騎士たちは戦のない世が続いたことによって鍛練を怠り、王や貴族には、自分の領地、領民を守るといふ仕事すらも存在しなくなっていたのだ。

そしてそこを狙ったかのように湧いて出た疫病ネズミの群れ。

群れを率いるのは人間を大きく超える巨体を誇る毒ネズミ。まさにネズミのデーモンと言っても過言ではないだろう。

そんなネズミに襲われた国は、騎士団が役に立たない以上最終手段に出た。

それは村ごと閉鎖し、疫病にかかった人間も、生き残って尚、戦うことを諦めていない現地の兵も全てを見殺しにして村ごと焼き払うというものだった。

そしてそれを王家が率先して行うということに、この国の王子リカールは反発しているのだ。

「疫病に罹った者の薬なら『腐れ谷』という場所に大量に売ってくれる商人がいるでしょう！」

人を越えた巨大なネズミとは言っても所詮はネズミ。戦って殺せばいいでしょう！

なぜ戦おうとしないのですか！？

なぜ民を守るべき僕達王族が犠牲を前提にしてネズミ共に屈するのですか！？」

「黙れリカール。」

我が息子ともあろう者が感情的になるでない！

助けられるのならそれもいいだろう。

だがそれは不可能だ。我が国の騎士団ではネズミの殲滅は出来ない。い。

疫病に罹患した者全てに薬を与えることも金銭的に不可能だ。

出来ることと出来ないことを見極め、あくまで理性による判断が出来ないようでは王とは言えんぞ」

「父上、僕は犠牲を前提に考えられる王になりたいのではありませんせん。

確かに一人の人間は自身の手の届く範囲しか守れない。

ですが、僕が王子として父上の後を継いで次期王を目指しているのは国の全てをその手中に収める王になることが国全てを自らの手の届く範囲に出来ると思っただからです。

父上がそのような考えをなさるのなら私は王になどならなくてもいい。

今日より僕は一人の騎士として国中の民を、兵を、この手の届く

「範圍全てを救って見せます！」

そう言つて王の言葉を待たずに立ち去る。

頑固な息子に一人取り残された王は、

「まったく、あ奴は分かつておらん。

王とはどういふことか分かつておらん。

だが……あんな考えが出来る息子を持てたことは父としては誇つてよいのかもしれん」

王は亡き妻を思い出していた。

息子リカールの言葉、力強さは、かつて王が惚れた一人の女性に瓜二つだったからだ。

「リカール……ワシは王として行動せねばならん。

だがせめて……お前が志を貫き通せるよう祈つておるぞ」

こうしてリカールは城を離れ、各地辺境を転々とし始めた。

すぐに王の耳にも情報は届くようになる。

『王子、民を救うため自ら戦場に現る！』

その後の活躍は、たった一人の王子がやったには大きすぎる成果を挙げ、国内の生き残った民や兵、すべてに希望を与えるものだった。

王子リカールは一人の騎士であった。

第3話：リカール王子の決意（後書き）

ちなみにすでに疫病に罹った人への薬は、王子が『腐れ谷』へ行
って婆さんを情でほだした……ってのは無理でしょうからせつせと
ドロップアイテム目当てで雑魚狩りしたということ。

それでまあ、不死になってからは王子も例外ではなく、これまで
の功績全てを無視した扱いの末に「北の不死院」に投獄。その後脱
出し、「センの古城」にてアイアンゴーレム撃破に向けて腕を磨い
ている内に亡者になってしまったのでは？ と考えております。

最初は『史上最強の弟子ケンイチ』の赤羽刀の話で秋雨先生とレ
イピア使いの小物との戦いをリカールとアイアンゴーレムで再現す
るのも面白いかと思ったんですが、それやるとアイアンゴーレムが
カッコよすぎるのでやめましたw

書いてみますと、

「アイアンゴーレムか……知っているぞ。

素手で人間の雑兵を虐殺するためにデザインされた兵器だそうじ
やないか。

突き刺しを主とする刺剣は君の弱点とみた！」

「ゴー（面白い仮説だね。では証明してくれないか？）」

ヒュヒュ（三回以上の連続突きは『リカールの刺剣』には無理）

「何！？ 前進したと見せかけて全力で下がっている!？」

「ゴゴー（この程度私にとっては低い問題だよ。というか君弱すぎ）」

「うわー」

こうして『不死の王子』リカールは掴まれて投げられて転落死し、なんとか生き延びたものの、人間性を失って亡者となりました、とさ。

人間とアイアンゴーレムの体格差じゃ、投げ技とか刺剣とか、そんなの抜きにしても普通の人間には勝てないでしょww

などと考えたりしております

まあ、これもフロム脳のなせる技ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9428x/>

読んで楽しむダークソウル

2011年10月28日11時14分発行